

# 東日本大震災追悼式

大震災から4年目となる3月11日、二本松市の総合葬祭ほうりんで東日本大震災追悼式が行われ、ご遺族・ご来賓あわせて約160人が出席しました。式のはじめに参加者全員で黙とうをささげ、犠牲になられた方々のご冥福を祈りました。

馬場町長は式辞で、「この震災からの復興を必ずや成し遂げ、新しい浪江のまちづくりを目指し、町民の皆さんと一丸となって力を結集し、最善を尽くすことを誓います。未来に向かって力強く歩む私たちを見守りください」と御霊に向かって語りかけました。

続いて来賓の方々が追悼の辞を述べたあと、遺族代表として大学生の高野里湖さんがマイクの前に立ちました。あの日、請戸に住む祖父父母を亡くした高野さんの追悼のことばから、一部を抜粋してご紹介します。



## 追悼のことば

遺族代表 高野 里湖

4年前の今日は、私の中学校の卒業の日で、午前中は卒業式、午後からは請戸の祖父父母のところへ卒業の挨拶と高校の合格を伝えるべく予定でした。そんなうれし楽しい日に、大切な家族を同時に二人も失うことになってしまったのです。

優しく力強かった祖父。脳内出血



追悼の辞を述べる  
遺族代表の高野里湖さん

で倒れた後も請戸に行くたびに笑顔で迎えてくれました。元気だったころはよく庭でバーベキューをしましたね。祖母は、毎回請戸に行くたびに、今でも耳に残っている「里湖ちゃん、おかえりくらっしゅい」の明るい声…。とても笑顔のチャイミングな、動物好きの私の自慢のおばあちゃんでした。

まさかあの日を境に、もう二度と二人に会えないなんて…。自分も、もし請戸に早い時間から卒業報告に行っていたら、この場には立っていないかもしれない。

そして今こうして生きている、生かされている自分。生前、祖父父母からは「自由に生きなさい」とも言われていました。

私は現在、入学式のなかった高校生活も卒業し、今は埼玉の地で大学に通っております。とても楽しく生活しています。福島を離れ、とても感じることは、東日本大震災の記憶の風化です。新天地で生活してみると、はつきりと感じる被災地との距離感、温度差。たった4年の歳月がこうさせてしまうのでしょうか…。

私たち遺族はこの震災で亡くなった方々の死というものを無駄にしてはいけません。機会あるごとに記憶の風化を遅らせませんか？

私は請戸じいちゃん、請戸ばあちゃん、お顔を忘れません。そしてご参列の皆さまも、震災で亡くなられたお身内の、皆さまにとってのあの優しい笑顔を今、思い出してみてください。